五十三

てならひ

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

第五十三

共五十四巻

渡利邑松浦氏

国会図

そのころ横川になにかし僧都とかいひていと
たうとき人すみけりやそぢあまりの母五十ばかり
のいもうとありけりふるき願（グワン）ありてはつせにま
うでたりけりむつましうやむごとなく思ふでし
のあざりをそへて仏（ホトケ）経くやうすることおこなひけり
事どもおほくしてかへるはならざかといふ山
こえけるほどよりこの母のあま君心ちあしうしければ
かくてはいかでかのこりの道をもおはしつかん
ともてさはぎてうぢのわたりにしりたりける人
の家ありけるにとゞめてけふばかりやすめたてまつるに
なほいたうわづらへばよ河にせうそこしたり

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

ごりうまのあひふりくてこゝしむいぞしじとさひを
きとうぞうのさ家なりけるおほやけ道の宮よそてあくるや
なりんとおぼやらえていそぎりのしめくるま御しむ
ゐくをあつかひ人のさ家をあつかうもでしの中に
もあんあるしてうちしかもしくと家あるじきらて
みさけあうじこけおくといくうおひのくる人のさとも
をなやこのふりのぞくとうしろめたく大ぎに思ひて
のひたればあそいふべく気色やくいとさう思ひて
のうせずく山うしうもあれぞやうく井てなり
べきまなならぬ紳倫くおりてまいもと紵とこわさい
出んるまゝを蔵朱雀院れ御覧まくうらの院と

のひし所こそれまりすしけと出てくのえる儒録
しもの女にれば一二日やぞらむさいとひまやり紵ん
つきれば物聲にたんきのふくこれまうぐふなるとそ
也をかやし文章をつくり聞さかくとらびてのくさる
をこれまうしまさくばらやいろづくなる院の法ん數ま
こそ給の連祖までの人をつくまようやと宮の
為といつぞいもようなくおぼやあ院なれど人ま
なくひやちらをとそしえせるやうのあれおとなふ
とうく楽どもの人とみなうひ舞はまちどちうれ
それつらひたどして或いまる儒教ひくつ沙い
世いつくあまでおそうしきなる所のかとなへ給く

大とこたち経よめなとの給このはつ勢にそひた
りしあざりとおなじやうなれいさひとつを給まし
のあふすりのつき〳〵しきほどの下（ゲ）らうほうしに火
ともさせて人もよらぬうしろのかたにいきた
り（森）もりかとみゆる木の下をうとましげのわたりぞや
や見入るゝにしろき物のひろごりたるぞみゆる
かれはなにぞとたちとまりて火をあかくなして
見ればものゝゐたるすがたなりきつねの変化し
たるにくし見あらはさんとてひとりは今すこし
あゆみよるいまひとりはあなようなよからぬ物
ならんといひてさやうの物し（退）ぞくべき印をつく
りつゝさすがに猶まもるかしらのかみあらばふ
とりぬべき心ちするにこの火ともしたる大とこ
はゞかりもなくおくなきさまにてちかくよりてそ
のさまを見ればかみはながくつや〳〵として大きなる
木のねのいとあら〳〵しきによりゐていみじう
なくめづらしき事にも侍るかな僧都の御坊に
御らんぜさせたてまつらばやといへばげにあやしきこと
なりとてひとりはまうでゝかゝることなんと申
すきつねの人に変化すとはむかしよりきゝをど
まだみぬものなりとてわざとおりておはすの（オチツキノ用云）
わたらせ給はんとするほどによりて下（ゲ）すどもみな

はか〱しきはみつし所なとあるへかしきことゝ
もをかゝるわたりにはいそく物なりけれはゐしつ
まりなともしたるまゝに四五人してこゝなるもの
をみるにかはる事もなしあやしうて時のうつ
るまて見るとく夜も明はてなん人かなにそとみ
あらはさんと心にさるへき真言をよみ印をつくりて
こゝろみるにしるくやおもふらんこれは人也さらに非
常のけしからぬ物にあらすよりてとへなく成
たる人にはあらぬにこそあめれもし死にたり
ける人をすてたりけるかよみかへりたるかといふな
にのさる人をかこの院のうちにはすて侍らんた
とひまことに人なりともきつねこたまやうの物の
あさむきてとりもてきたるにこそ侍らめと
ふひんにも侍りけるかなけからひあるへき所にこそ
侍るへけれといひてありつるやともりのをのこを
よふ山ひこのこたふるもいとおそろしあやしの
さまにひたいおしあけて出きたりこゝには
わかき女なとやすみ給ふとみすれは
きつねのつかうまつる也此木のもとになん時〱
あやしきわさし侍るをとゝしの秋もこゝに侍る
人の子のふたつはかりに侍りしをとりてまうてきたりし
かとも見おとろかす侍りききつねはさこそ人

をびやかせどことにもあらぬやつといふさまいとなれたりかのよぶかきまゐり物の所に心をよせたるなるべし僧都さらばさやうのもののしわざかなほよくみよとてこのものおぢせぬ法師をよせたれば鬼か神か狐か木霊かかばかりの天の下の験者のおはしますにはえかくれたてまつらじなのりたまへ〳〵ときぬをとりてひけばかほをひきいれていよ〳〵なくいであなさがなのこ玉のおにやまさにかくれなんやといひつゝかほをみんとするにむかしありけんめもはなもなかりける女おにゝやあらんとむくつけきをたのもしういかきさまを人にみせんと思ひて衣をひきぬがせんとすればうつぶしてこゑたつばかりなくなにゝまれかくあやしき事なべて世にあらじとてみはてんと思ふに雨（浮舟ノ失セシ翌日ノ夜也）いたくふりぬべしかくておいたらばしにはてはべりぬべしかきのもとにこそいださめといふ僧都まことの人のかたちなりそのいのちたえぬをみる〳〵すてん事いみじき事なり池におよぐいを山になく鹿をだに人にとらへられてしなんとするをみてたすけざらんはいとかなしかるべし人の命ひさしかるまじき物なれどのこりの命一二日をもをしまずはあるべからず鬼

にも神にも霊（領）ぜられ人にお（ワ）はれ人にはかりごたれ
ても是よこさまのし（死）にをすべき物にこそはあめ
れ仏のかならずすくひ給ふべききはなり猶心
みにしばしゆをのませなどしてたすけ心みんつ
ゐにしなばいふかぎりにあらずとのたまひてこの
大とこしてかゝへいれさせ給ふをでしどもたいだいし
きわざかないたうわづらひ給ふ人の御あたりに
よからぬ物をとりいれてけがらひかならずいで
きなんとすともどくもあり又物の変化にもあれ
めにみすみすいける人をかゝる雨にうちうしなはせんはいみじ
き事なればなど心々にいふ下（ゲ）す

などはいとさはがしく物をうたていひなす物
なれば人さは（ワ）がしからぬかくれのかたになんふせ（ウキ舟ノ）
たりける御車よせており給ふほどいたうくるし
がり給ふとてのゝしるすこししづまりて僧都あり
つる人いかゞなりぬるとゝひ給ふなよなよと
して物もいはずいきもし侍らずなにか物にけど
られにける人にこそといふをいもうとのあま君
きゝ給ひて何事ぞとゝふ（僧都ノ妹）しかしかの事をなん六
十にあまる年めづらかなる物をみ給へつるとの
給ふうちきくまゝにおの（尼ノ）が寺（泊瀬）にてみしゆめありき
いかやうなる人ぞまづそのさまみんとなきて

の給ふさまはひんがしのやりどゝふ御うさや山添を
よしいゐ色おいらかに抜えてみる人もさはらぬく
影すてゝを書たりけるいやしの字うつくしげなれ
女れしろきおや入きぬぐるのくれなゐ木の西
かほるの香をいとしうつけしくてあくまれは
らひのさまなしらず敬意のまししてすゝめ入のくら
れたしるさあまとそてあくごさら敬ひしてい
ざれは遠所をりのなりけれむとをありさ海みね
人をおこらしつゝていざ託い遠所くいけ菊やう
なもあらで所をうかめ紙侍のくりみあ苗さらま
物のあ人やりのなける人の宗くてを拂し給へると

いゐ色ど物おぼえさるゝ海なりゆきまでまづりうきを
くひへおりてまろのさしてげんしつうふらしていろやうま
なりされほかくいみじ気色ぞのかとてよ人なく
なかめへしあらはしめ人やまんざのあさつらまいふ
されはよおや大臣とのあつひかりとい色ど
絆なとの院さあま理ようをはくいれ気僧都もあ
ののぞきくりのあふなふぬしまさうやうくてもし
てとへとの跡くじいやまよつかまさりしりくめやう
なれど悪いま大作らしきぞのたなき心ひなこ
をりてまつらふ色なこしさんじふいとやむおやめ
なま人へまゝに給めくまゝしまゝつとことまくはや掟

さうを絶らん見くるしきまでのなきいひあへるを
なほさる人はみなかゝるまつはしきこともぞある
なとてかく悲しくあさましき世やのやつるゝひ絶
よりもあはれ人をいましてくつえたりしう聞えて
ふらはしをはようひ井なるしうめひとたまてどつえあの
あうふうおみしき給いさつくはのきしとみるか
きらありのひさられなりけるにかれく御ことあ
世なしけくなみてさの侍えきひたうれくとあれ
ひうやいらしくつるしと思ふ人のうしろ仏の
みちひきあへ我と心ゆるそうひなくなりぬらん
やゝ中くなるへうる絶や思ひらんさる人ま契りのさて

君くみたてまつらめる程はかくの御有様絶えて
いひけぐれぞうらしていみのぐるまゝもあ
やしき侍るなめれとのなりける人はみえをてはふるあの
にほしいまめてよといはのほまりみえ侍
遠とめく給とまてくとも思ふそあれはひやう
めりすれば思ふの給そめのまて古き
りけるかへとものもいたくなりぬる方ま
ましきなとやあしくれとて見まとあさいやす見侍
たはれなくうつくしけれ我をあはれに悲しくうれしきに
とふ人のむ宿ともさんとて出きこえけるを御
やせうくとふ二日計てかへるまゝの人々とい

みかのかぢする声たえずあやしき事と思ひさはぐその
わたりの下衆などの僧都につかうまつりける
かくておはしますなりとてとふらひいでくるも物語
などしていふをきけば故八宮の御女右大将殿の
かよひ給ひしことになやみ給ふこともなくてにはか
にかくれ給へりとてさはぎ侍るその御さうそうの
雑事どもつかうまつり侍るとて昨日はえまゐり
侍らざりしといふさやうの人の玉しゐをおにの
とりもてきたるにやと思ふにもかつみるみる
あるものともおぼえずあやうくおそろしとおぼす
人〻よべみやられし火はしかこと〳〵しきけしき
もみえざりしをといふことさら事そぎていか
めしうも侍らざりしといふけがらひたる人とて
立ながらおひかへしつ大将殿は宮の御娘もち給へりし
はうせ給ひて年ごろに成ぬるものをたれをいふにか
あらん姫宮をおきたてまつりてよにこと
心おはせじなどいふ尼君よくなり給ひぬかたも
あきぬればかくうたてある所に久しうおはせんも
びんなしとてかへるこの人はなほいとよはげ也
みちのほどもいかゞものし給はんと心くるしき
ことゝいひあへり車ふたつして老人のり給へるには
つかうまつる尼ふたりつぎのにはこの人をふせてかたはらの

人をふせてかたはらにいまひとりのりそひてみち
すから行もやらて車さしとめてゆまゐりなとし給
ひえ坂もとにをのといふ所にそすみ給ひけるそこ
におはしつく程いと遠し中やとりをまうく
へかりけるなといひて夜ふけておはしつきぬ
僧都はおやをあつかひむすめの尼君はこのしら
ぬ人をはくゝみてみないたきおろしつゝやすむ
老の病のいつともなきかくるしと思給へし遠
道のなこりこそしはしわつらひ給けれやう〳〵よろ
しうなり給にけれは僧都はのほり給ぬかゝる人なん
ゐてきたるなと法師のあたりにはよからぬこと
なれは見さりし人にはまねはす尼君もみな口かためさせ
つゝもしたつねくる人もやあると思ふもしつ
心なし（尼心）いかてさるゐ中人のすむあたりにかゝる
人おちあふれけん物詣なとしたりける
人の心ちなとわつらひけんをまゝはゝなとやう
の人のたはかりてをかせけるにやなとそ思よりける
川になかしてよといひし一ことよりほかに物も
さらにの給はねはいとおほつかなく思ひていつしか人
にもなしてみんと思ふにつく〳〵としておきあ
かるよもなくいとあやしうのみものし給へはつゐに
いくましき人にやと思ひなからうちすてんも

いと物しういみし夏つゐるりし出くはしめより
いみらせしあざらかなを思ひやりなきしやくせさ
極熱ふうちあへくあけつふあせてま雲又月も色
ぬいしうびしうひなきこそ経忍思ひしびく僧都の
ほりしまか経（文ノ言）なり給へこれ人さすけゆへ山をう
ふかふまでおくらゐまづかりける人々をつこさし
みあしゐ乱をわくさうねまこうあがめでたの仏（我仏也僧都ヲサシテ云ヘリ）京
に出給まどしうあり挑あいまてはおへたけと（山下ハ山ほとりヲ取テ）
いみし花ましをつ刻ほくけくなれ給へまいづいや
あやしきうきうれしくまでもありける人の命を
やがてうちすてまつりのこざさうべき契りのかくこそ

を報恩もみつけし北山みなとをあきてんのしそ
まゝとまうすこそ侍るなりとおもへるも
おはしめへつまうらひと思ひて月ごろのうきさ海
を見く給ふかく（尼詞）仰せらまつるふ人をもうしさ事
あのつゝあれへさ給いてのおほろくをいつきま
けふねぢけらう所なくのこりのしづくのさかりと
みしなげゝもうくていきおもるまゝさなりなし物は
ありけれあらくの詞へしみ（僧都詞）つけしよりめづらしう
なる人のほゞありさ海のかいぐくとてさうしのぞきく
見給てけふはいやしからやうさくなりあれ人のほよう
おほんかおほ（経信ノ人也）とくれむしくひまようつろつちよも

容貌
ミメカタチ也

おひゆくのけありのなからうちひめまてしうくうく
すまれ給ひせんかしさふやとおもひまゐらせしも
御しやとくひ所さうに（たゞ）きこ給ふこともましたまふ
うし初瀬の観音の御てら人なりとのみへだすおう（信敬ノ詞）
それえんまにしたがひてこうみちひ天のふらあれ
ねがはく事へいのみつかなやての給ひわや　しつゝめてし
まゐらせし光季のおほやけのめしはつかしさくら（四院従）
らんかくこそありたり山を出所くはすくらまかう
人のためになんをとらひさま給ふとものゝやさし
わらんいとゝきくらくるへしやおぼしてしかも
いひて人にまさりきこしやうくく侍部かくうれりける

なとくはちかひまさしさんの法師まくいむほとの中（戒ヲ破ルヿモ多シ常ノ詞）
ふ庵みろ成を所ゐりしめやを母のまかに法あまて又
うしてまとらずあやまりもとなしらしひ六十ばり
あまりて今世かよくのりもとさかりんてぞさるべきま
ふそをわうめやその給ふさらの人のとるのことびん
なくいひおしはらの財すかに仏法はきまどとなしはら
なりとむようずるを思ひいふこれは法のおほしまし
おしみしもいやいとらじ死事ともそちのひ給ふ人
むとようちし給ふあの月なる人まかせとの門きく給
やまみれ物かゝくへんとまじいりしさらずやうかゆけ
はかりのまいし語まれしうてやすそのおぼらさとはうくう

かぢし給月ごろいさゝかもあらはれざりつる物
の氣てうぜられて（モノケノ詞）をのれはこゝまでまうで來て
かくてうぜられたてまつるべき身にもあらずむかしは
行ひせし法師のいさゝかなる世にうらみを
とゞめてたゞよひありきし程に（宇治ノ）よき女のあまた
住給ふ所にすみつきて（姉君）かたへはうしなひてしに
此人（浮）は心と世を恨み給ひて我いかでしなんといふ
ことをよるひるの給ひしにたよりをえていとくら
き夜ひとり物し給ひしをとりてしなりされど觀音
とざまかうざまにはぐゝみ給ひければこの僧都に
まけたてまつりぬいまはまかりなんとのゝしる
いふは何ぞよとゝへばつきたる人物はかなきに
やはか〴〵しきもいはずさうじみ（浮舟）の心ちはさはやか
りていさゝか物おぼえて見まはしたれば（浮心）ひとり
みし人のかほはなくて皆老法師ゆがみおとろへ
たる物どものみおほかればしらぬくにゝきにける
心ちしていとかなしありし世のこと思ひいづれ
どすみけん所たれといひし人とだにたしか
にはか〴〵しくもおぼえずたゞ我はかぎりとて身
をなげし人ぞかしいづくにきにけるにかとせめて
思ひいづれば（浮舟宇治ニテ身ヲナゲント思ヒシヿ今思出せり）いといみじと物を思ひなげきてみな
人ねたりしにつまどをはなちていでたりしに風

けしう川なみもあらうきこえしをひとりもの恐しかりしかはこしかたゆくさきもおほえてすのこのはしにあしをさしおろしなからいくへきかたもまとはれて帰りいらむもなかそらにて心つよくこの世にうせなんと思たちしををこかましうて人にみつけられんよりは鬼もなにもくひうしなひてよといひつゝつくつくとゐたりしを（霊ノ今現レテ云ル詞浮舟ノ心ニハ匂ト思也）いときよけなる男のよりきていさたまへおのかりへといひていたく心ちのせしをみや（匂）ときこえし人のし給ふとおほえしほとより心ちまとひにけるなめりしらぬ所にすゑをきてこのおとこきえうせぬとみしをつゐにかくほいの事もせすなりぬると思ひつゝいみしうなくと思ひし程にそのゝちの事はたえていかにもいかにもおほえす人のいふを聞はおほくの日ころも経にけりいかにうきさまをしらぬ人にあつかはれみえつらむとはつかしうつゐにかくて生かへりぬるかと思ふもくちをしけれはいみしうおほえて中〳〵しつみ給へる日比はうつし心もなきさまにてものいさゝかまゐるおりもありつるをつゆはかりの湯をたにまいらす（尼ノ詞）いかなれはかくたのもしけなくのみはおはするそうちはへぬるみなとし給へる事はさめ給ひてさ

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

こやうにみし人もたえまてうち思ひきこゆらをと」
あくゝよゆむなりなけくそうひのくあひひやし
侍ゝれ人（尼ノ内ノモノ）をもわらはしき源（ジ）さ侍かしちらと人まゐれ
ゆとけくしてぞおしゝこそのりつきけるを思（ウキフネ）すましなくとい
りぐしなんとぞ思ひつらつと侍へどもおほかりつまくいふ
ときまさる人の余なれはいとしうれくてやうく
り陸もらぬ人をぞ抱きかなとしけるよろづけろく
おもやうゐりて抱くいつとこうまてうちやの前語よ
わされ（ウキノ内）すし侍くよさてのとうんいく座うもうち
ゐまよのゆへ（たノ内）をいやとし老なりう源（シ）さ侍をいのつく
あさまし侍し年ぞ事てまいしく覚ゆつれをうか

又蔵じかるをとうけさうをなきらむのとおけ遣ぞりと
うつまれ（シロカ大ル）くしさ人のむゑてしわのしをき井
ぞ此のんず僧都君今はかゞしうまくいけまや
絶なかのへとのひを気てのおゐめゐゆめのやう
なら人とみすくまつるのほと尼君をもうちしびく
まかてたおしすへけくらぐしてもいけつり語
さうしかりまあさましうひ気ゆひさうらやうまうまつ
まだいうもをぞれおとさまてたま遣ぞはやく（老人多ト云ニヤ）
とけうなり一ときたうぬはくとおほかる
あまてめもあやまいみじきさまの人のわさなるまゝに
きこえましん座られ思ふにもあやうく心ちすれどもね（尼ノ内）

どういしせうくめじうるまいらじやと中の事まは僧
せく（隠）なぞそしきみしのふいげくふ多きとやらし人
かゝる所にいつでおもしきうずやさめてしとふを
いとおづしと思ひておや（ウキ舟）ぢうし給はこれ忌
さるまゝやうしんあり哭んさ庵なゝらも所にはおど
まゆしびさぐほのかにおもひげなりまやくてどいしぐ
いつぐこのあふうらじとおもほけく夕善ごゝふらし
けりくそてなりのみかやてるまくちうくゆきなる
きのわつまて下りける人のいづくこて井くめくあてち
なりきしうきしつまあり乃事へ殺なけりうられとこ
もおもひ出られ給らびといやちうとげおりいひずして
世中はなくとわりなきことゝいつぐ人はさしゆずきく
つらる人もわりゝばいといらずうしそとてあいぬ
おさつまとふをそじくるしやおぼげしられさしときぞ
うくや娘をこれ幸らまきん行やらのおさあかまゝ
ものづし死んらまくるまいのあまく花のひさろ
こそしうきんとましんやしづんなくぞおぼしける
これあるじ（大尼君）もめくなる人なりけりむすめ尼君
は上達部の北にてありけるがその人なくなれ
統く後むすめひとりをいみじくかしづきて
きむ（シン）だちをむこにして思ひあつかひけるを
そめのなく成にそれびしいみじやと思ひいりてう

ちをもかへかかる山里にはすみはじめたるなり
けり世とともにこひわたる人のかたみにもおもひよそへ
つべからん人をだにみいでてしがなつれづれも心ぼそき
ままにおもひなげきけるをかく思ひかけぬ人の
かたちけはひもまさりざまなるをえたれば
うつつのことともおぼえずあやしき心ちしながら
うれしと思ふねびにたれど（娘尼）いときよげによしありてありさ
まもあてはかなりむかしの山里（宇治 ウキノ心）よりは水の
をともなごやかなりつくりざまゆへある所の
木だちおもしろくせんざいもをかしくゆへ
をつくしたり秋になり行ばそらのけしきも
あはれなるにかど田のいねかるとて所につけたるものまね
びしつつわかき女どもはうたうたひけうじあへりひた
ひきならすをともをかしく見しあづまぢの事なども
思ひいでられてかの夕霧のみやすどころ（夕霧ニ書タリツキ面白）のおはせし山里
よりはいますこしいりて山にかたかけたる家なれ
ば松かげしげく風のをともいと心ぼそきにつれ
づれにおこなひをのみしつついつともなくしめ
やかなり尼君ぞ（小野ノ尼宮尼）月などあかき夜はきんなどひき
たまふ少将の尼君などいふ人はびはひきなどしつ
つあそぶかかるわざはしたまふや（ウキノ方 イヤミキ才トこし）つれづれなるにな
どいふむかしもあやしかりける身にて心のどか

さやうなる事もへだてなどもかくろへしかはしいさゝかう
おほしま所なりけずもおひつゞくみせけるかなとおもく
さうゞくまゐらせはける人の心を慰むるありくはほき
てこそ思ひつゞ給あさましく過ちられけるをけると見
きなりつくらう知しはれ八年なりひよ
ウキ かとるけし浅瀬川へはやき瀬をこのうへ思
けくなる過つとく思心のおつゝほ心うられ羽すと
きうしろめたくうとましく我まで思ひ至りぬ月浪
あつきさらかく思ひ人やとがむらんこゝろよそいつま
しく心出けくらくへ御消息なとすゝふいらふ至
我かゝるとかくあれはけくくやうらなけゞめそは

ウキ いとうくてうき世の中はのかるゝともかれう
あさまし年月のほどにこそは命をかぎりと思ひ果し程を
まうしき人おはするときこゆるを聞きさしてこゝ
わすられずさゝおやりのまどひのあはれめおほえ
よるひるにひのての人なとしくにおさんさかりしまで
そゝのふかめ人なきむちしまんじほとはかうらん救世
まだすき物といりつゞうちふかんおもし心なける人も
睦ましあつれけりつ思ひくはけり事なくつくるらひ
これまでさわしなきともおりく心ちいくらもぞ
うき人のつゝ山の中は今おや思ひたえこゝろさ
昔より心なりけまでぞさゝつゝとし人は何う

尼七八人そつねの人かすにてはへりけるそれらかむ
すめむまこやうのものとも京に宮つかへするもこと
さまにてあるもとき〳〵そかよひけるかやうの
人につけてみえしあたりにいきかよひおのつから世に
ありけりとたれにもたれにもきかれたてまつらんこといみし
くはつかしかるへしいかなるさまにてさすらへ
けんなと思ひやり世つかすあやしかるへきを思へは
かゝる人々にかけてもみえすたゝ侍従こもき（女童也）とて
尼君のわか人にしたりける二人をのみそこの
御かたにいひわけたりけるみめも心さまもむかし見し
みやこ鳥に似たるはなし何事につけても

世中にあらぬ所はこれにやあらんとそかつは思
ひなされけるかくのみ人にしられしと忍ひ給へ
はまことにわつらはしかるへきゆへある人にも物し給
ふらんとてくはしき事ある人々にもしらせす
尼君のむかしのむこの君いまは中将にてものし
けるおとうとのせんしの君僧都の御もとにものし
給ける山こもりしたるをとふらひにはらからの
君たちつねにのほりけり横川にかよふみちのたより
によせて中将こゝ（尼ノ所へ）におはしたりさき（先）うちをひて
あてやかなるおとこのいりくるをみいたして
しのひやか（ウキ舟）におはせし人（白）の御さまけはひそ

さやうに思ひ（ウヂノ白ツ）でゝうくあまたをかしげにてさすがに
弁然つれ〳〵なまめきてことに侍る人々にだに御まへにも
にほりしうたてしそのこゝろほまう色ゝさゝおもてして
もいのしろくぞ見えける色て。きて籠りなし。されまて
めさうはうらゝのかうしきよせなすゝめのきとこそことの
まうきめまつしして君（中ね）もれぬさうさくまく菊れ
そそはなひすへられまけ（おは）がうそし弁ほの年廿七
八のみやぞさくわびとくのひかりちかけのうめさ給も
でいあちまうとおもほさしぐらに几帳たてゝまい
めしゝ給ふまづうちなきて（尼君）うちとろのけのわけ八色
ましうていてふけやそくのとすん給ふを御墨の

ひめ君はあ絹まうやすしさまうましのうちとすれ
ずやと給ふをとうつむかやしく思給ふことの給
へるを源氏（中の君）うちかゝれますだけしいかくも
ものへられねおもなけれをあなかちにもてまるれ
ずかなうゆあり給はをこゝろけくすん山（尼君）ごおり
もうつやゝしてはるゝぐさち給ふをおほすじくまじ
なりとたひまうじしきなくへてはさ給さけちなく
やうかな給くまんなふむみなる（有形シテトし）ふ気すてゝものゝ
ゆつなとけのよ山あとさにならう（しらい）やとはかりし合
やりよちよる御物まてびよすんむをおもゝとぬ
御（ミ）むかへもよふすびのせぬむざるてけるとそろう

ならび思ふ人もおほくなをいふ人々は
まいえんなきしゐう人我はるゝをもちひつゝをな
ぞやうのさの院じ達ぞなれすしあさましうまくさ
きりの事もはかなく見なれちしてひろのゑへふりい
づぶるとめづらしく物ずさましうやうかはりてまふ
かひ（尼ノ心）なくなりぬる人よりもこえ（ふかれ）さのほ（だ）ひまへ
なにとのゆゑ思ふやうなりしとこそへそのなる思ひ
なしろな歎いとふるし気色もてみとぶふ
とぢめ絵などなりにあんとこひ思ふなむやはれば
五あはうく物し始く記はほきてともめつらしく
あそれはおぼゆくふのふまくにと（手習ノ中ニノ〜云也山ミノ手ト）あそびつゝる

思ひつべし。かの君（ウキ）を見まし数と思ひいづるく
おもくそなけがめいでし給へるさ海ゆかしうくしき
ろさきて面白いやゝなまけなくあさやかなるすゝ
そうまもひたぶいろうはなつひさうすやひつうまま
みしずくろまをさをまますうれおぼゆうこと世
をみしすむかもりてあやしうもうつくしれさ思ひ
はくこそをくしいらぎきら物ども生きかへる
きまにしぬしきまづくすり侍る人なかりし人々故姫（尼ノムスメ）
君のおはしまゐりしむかしみし道よ中ねらのきと
あ人みずくまかでいやしき事よしもなずいくら
ひき園よてわりしまさせずやりとも見給あそび

なかりしやうひめへ語とあはれ（ウキノ心）いかんしやなかりと
すゞろまもく人にまみえんこそまほしけれきくらむ
のみつゝし思出らるゝ事やうなるもあるらむ思ひたらし
下まずれ（ウキノ心）なれと思ふ尼君より添へてまかりし人の有
あのはしまてみまつらひておねといひし人の勢
ときをりてらびらせ中将（中将ノ詞）のしてし人て皆
あられ物せさらんやや忘れさるをうち気色くる
ことものうくなりみゆとあさましや誰もなく
れも見えしのらんなとの侍りけりさうりすれに
尼人まくあまれむつましき世のしの事とも忘りぬ
たゝ侍いではめの（中将ノ詞）らりの侍る今侍る顔日あらて
かしこまり侍る所ぞれかすかなれのひたふるにかひなく
れさ夜まうすむかくましかりける人のうらみ思ふさまおほえ
のみしつ語を世経るも所へ人なれあらつらまほしうなる
やなれみ給ふきりれ侍るとの御（ウキ）尼君のまう（中将ノ心）はのみなり
つれなしあてて見侍つまりけるかめりと思ふくましう
て二夜の小尼をさうだむともは待ひなんうしむ
のし人をいふあられらぞとてのへいとしくとふかき
たなまずれさくし給めるをとしむひとと侍る思ふこそ（中将ノ詞）
みし侍あうと紙まずれてくなくなりの御隠めり
さかしむあは侍しる人御ともなきてまうりゆえしのりし
ものまなせまし給ひるをうらとけ御所へ御侍まさう後

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

御いくほらんどつゝんとのふ（中将ノ心）事どもをも
かりけるをきゝつけてなん人なしんけはひやれ
あしかるを侍とほのかなりつ給とはかく思ひけに
まのにとくへどそのまゝくもつしむ（手ノ何）せめけりうさき
かし給してんとのきい色ぞ（中将ノ心）からつけまとひさず
わかもとのさかし紀山ちしても面をやきぬ日もくれ
めでしといふまうちのかされて出給まへ御つのさ
とみふへし御おほらく（御）給ふ（中将ノ心）らんとくらぞかゝて
ひらつこゝちさてかへ人の御りひをかどうすおはし
とうがはらこうなとこゐいの人どもま物めでしなと
おく人はいとさまよけはおゝりまゐりくもわび給さり

給よけるりかおすゞしくをかしくみやうけ[illegible]もえ
なまうざやとて故（ヒゲクロノ子息ナルヘシ）中納言の御あまをまをさむしびつ
よひ給ふなきとてもとぶめ給ふび（中将ノ訳ノ事）たや入殿が
ちよまんめのし給としそいふなれや尼君もの給
てひ（手習へ尼ノ詞）うくとのへくとかはし色ぞくゝるらんいと
はし気命なを給ふらんひくべき気をあつかきとおほしまして
まれくしをりくすしめくれこれ又ときたと駿河
の面も見すれずひしくずしや思ひけり人の
う色もうくみあきさうるて後もまさりもあらかく思ゐし
られ見てし侍る思ひきこえのべきへて世におはしませと
りさしをよふなれはさのあこうまゝやうくおはしたり

ゆかしかりけれましかるをさるやうまんもし（尚世ノヤウ二八十年物トこ）
しとおもしぬまさるたんといふる侍てもいらく（ウヂノ）
なみぐくだくて宮（ウヂノ宮）ぶくさきこ給るもいとしねどうや
しきいの人の人宮あれ雅まうつげのあと給あのやう
まうでつかうれくかしぬ世にまれふかく人まうる心地
すんとおもひ給へる今は心ぐるしき人世にありかち
らむとも思出ぞひたみち（尼君ヲ親ト思フトこ）にかうはしく心きゝ
ゆまてとの御あそびさへもげに何心なくうつくしげなう
ゐてゝぞ濁りなき井のくちのうちねるを山さとにたれ侍て
僧都をめづらしがりて世中のものがたりし給を
乗じところもつくづくときゝ給へる人ともは経なども見せ

て乗るをとらあそび給せんとしつゝ思あまりのおぼつかな給へ
なとゝもつけるでゝ小野（ナカ白）にこもりて籠わたれれば
そのかたちのさまは世のならひてたまでなくとかで心ざしのむ
づめうかうかふ人（尼）そらうこそなとしけれついでは風の
らきふもうたがはかの侍りのうちといとおぼくおもし
まざりけみしつきわかてたかとやおもつらん女ちく
うれしふ入はうしろぎうづくれ人ともやみこそ
まつさ姫宮の御ありさま女三宮ふかくおぼし物に
よそわかめまであきくれみて物を法師なりおものつらう
めなれてかくゆかしびんなる御しなりけりと
の御あん（中ノ君）じれもこの春まで世にありしてくやし

くて見出たる人とあれきく侍りしとてつくゑ事なれ
ばこまつのすゑいまだわらん（中将）なりけることのつれい
みなはかの人ようあらん世中とうしろくからる所ふ
はかられ侍りしむかし物語（住吉物語）の心ちをこそすれ
よの例の日かすなともすきぬるとくなんとそれ（尼上）
りしわかさるへきむけのひしこそなれはむしし思出
たる所まうすひのかねのわかれをなとも袖くらさ給
ひとなれはそれのしいとゝいやめ（涙）に尼君も押し給物
わかるゝのはいでゝこれ（中将）ひさるさ給ふ押し給らん
はかられまいらせとひ給へ（浮ノ君）まつかしけまてほのか
なるもみつあさゆくける程かくしげなくしもとあや

しとてまことに（尼ノ詞）侍ていとくはをぬくうのをみたし給
る斛めかこれ月ころみ給ふる人になれんりのなる
すのいやそとの思ひしをきさ給よくあらふありと人
みをうまん事を給くるしけは思くとのをこ給き
そうの翁（たいのゝう了イ二）のうとすしくはなま達かなし為やうし出てれりひ
ほく侍るとゆうくるのまきてわかへさうを給つらん
とふらふうらほど（中将詞）をむかりそ由のをまあんいかなは山
おの程みちのうしとわやましいへしましておほし
よるふらんかをはきちくさいとくにぬこさく給ふ
しへそとあようひりのけりすらまはあくとうしろえ給ふ
人はかなくゆかやしなかやなどゆうしけよのゝふて

いふ給とてたゝう紙に
（中将）あだし野の風になびくなをみなへしわれしめ
ゆはん道遠くともとかきて少将の尼して入れたり
尼君も見給ふこの御かへりかゝせ給へいと
心にくきけつき給へる人なれはうしろめたくも
あらじとそゝのかせはいとあやしき手をはいか
でかとてさらにきゝ給はねははしたなき事なり
とて尼君きこえさせつるやうによづかず人に似ぬ
人にてなん
（尼）うつしうへて思ひみだれぬをみなへしうき世
をそむく草のいほりにとありこたびはさもあり

ぬべしと思ひゆるしてかへりぬ文などわざとや
らむもさすがにうゐ／＼しうほのかに見しさまは
わすれず物思ふらんすぢなにごとゝしらねど哀な
れば八月十日あまりの程に小鷹がりのついでにお
はしたり例の尼よび出て（中将）ひとめ見しより静心
なくてなんとの給へりいらへ給ふべくもあらねば尼
君まつちの山のとなん見給ふるといひいだし給

（誰をかもまつちの山の女郎花秋とちぎれる人ぞあるらし）

ふ（中将尼ニ対面）たいめんし給へるにも（中将）心くるしきさまにて物し
給ふときゝし人の御うへなんのこりゆかしく侍りつるなに
ごとも心にかなはぬ心ちのみし侍れば山ずみもし
侍らまほしき心ありながらゆるい給まじき（親）人

人に思ひさはりてなんすぐし侍る世に心ちよげなる人
のうへはかくくしたる人の心からにやふさはしか
らずなん物思ひ給ふらん人に思ふ事をきこえばや
など心とゞめたるさまにかたらひ給ふ心ちよげな
らぬ御ねがひはきこえかはし給はんにつきなから
ぬさまになむ見え侍れど例の人にてはあらじと
花と見ておらんとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ
いとうたゝあるまで世をうらみ給めればのこ
りすくなきよはひの人だにいまはとそむき侍る
時はいとものゝ心ぼそくおぼえ侍し物を世をこめ
たるさかりにはつひにいかゞとなむ見給へ侍る
とおやがりていふ入てもなさけなしなほいさゝ

かにても聞え給へかゝる御すまひはすゞろなる事
もあはれしるこそ世のつねの事なれなどこし
らへてもいへど人に物きこゆらんかたもしらず何
事もいふかひなくのみこそといとつれなくて
ふし給へりまらうとはいづらあな心う秋をちぎれるは
すかい給ふにこそありけれなどうらみつゝ

前ノ引歌
誰をかもまつち
の山の女郎花
秋と契れる
人ぞあるらし

中将
松虫のこゑをたづねてきつれども又おぎ原
の露にまどひぬあないとおしこれをだになどせ
むれどさやうに世づいたらん事いひいでんもいと
心うく又いひそめてはかやうのをり〳〵にせめ
られんもむつかしうおぼゆればいらへをだにし給

ねハあまりいふかひなく思ひあへり尼君（ワカキ比）はやうは
今めきたる人にそありけるなこりなるへし
尼
秋の野の露わけきたる狩衣むくらしけれる
宿にかこつな（尼ノ狩衣トアルハ中将ノ衣モ十分トアルトニ）とてなんわつらはしかりきこゆめる
といふを（ウキ仏）うちにもなほかく心よりほかに世に
ありとしられはしむるをいとくるしとおほす心
のうちをはしらておとこ君をもあかす思ひ出つゝ
こひわたる人々なれはかくはかなきついてにても
うちかたらひきこえ給はんに心よりほかに世に
うしろめたくは見え給はぬ物を世のつねなるすち
におほしかけすともなさけなからぬ程に御いらへ
ばかりはきこえ給へかしなとひきうこかしつへく
いふさすかにかゝる古代の心ともにはありつかす今めきつゝ
こしをれうたこのましけにわか
やくけしきともはいとうしろめたうおほゆ限りも（ウキ身ノ心）
なくうき身なりけると見はてゝし命さへあさ
ましうなかくていかなるさまにさすらふへきなれ
らんひたふるになきものと人に見えきゝすてられ
てもやみなはやと思ひふし給へるに中将は大かた物
なけかしき事のあるにやいといたううちなけきつゝ（山里ハ秋こそことに侘しけれ鹿の鳴音に目をさましつゝ）
しのひやかに笛をふきならして鹿のなくね
になとひとりこつけはひまことに心ちなくはあるまし

あづまのしるくの思出らるゝも中々心ほく
しは今はしめてあはれと思ひす人まゐらすく
おほゆれど人ゝ母山ちうまとて思ひなりとまへうけん
と帰給ひけれて出なんとするは尼君なりとわさと
親と悲しさしけるとて心ならて出ゆくてなりぬつ（中将ノ詞リ云ニ兵八ム名カタキ故）
ちかなる里も心つくし給ぬれどなをとりひひをあなとてい
うすれがましうらんとさひがふびんすいやしや
のゝまみえししさ海人のめやしまつりしがすつれてすう
ひがくしきめる思出けるをあまりわらくちすれ給く
ふつうなりけるひも西のさ海はあしきすくまて
や思へどの人めあらんときうちを娘ぞの母后あつかひ

国ノ板房スヱノ様ナトノ五九ニモアリヤトや国ニ仏新ルヘシ

ゆらぎおはしけて
尼
娘の大将の月とあはれときゝ人や山のもちつ
ゐやゝまはとさらぬとすかがる八なりあまぞ絶つく（字ノ方ト云ニ）
すんさこし給ふとのふ心（中将ノ）どきめきして
中将
山にすふ入まて月頃なりのめみん禅やのゆく海
をえうしまやとけいふまめの大あまぞ竜人
ねくとゆめのにきくさを多りけれはさまうに絶てく
いづこなるてあくのしこうらむかあさ海しまく
わすくぎらぬすくなりくむかしのこしなをしもの
けくいたかまれとまおまひとりのねなりてしゆく（女ハ尼ノ云ヘ詞）
そのあはれのうしひきめくよとかきや月ますいつと

国立国会図書館　　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

おかしき物ぞかしいづらくそたち（スミテモ）琴とりてまいれ
といふにそれ（中将）なめりとをしはかりにきけどいかなる
所にかゝる人いかでこもりゐたらむさだめなき世
ぞこれにつけてあはれなるばんしき（女ノ調子好也）でうをいと
おかしう吹ていづらさらばとの給ふむすめの尼
君これもよきほどのすき物にて（尼ノ君）むかしきゝ侍し
よりもこよなくおぼえ侍るは山風をのみきゝ
（ハ手アカリタルトヤ）なれ侍りけるみゝからにやとていでことよう侍
らんといひながらひく（中将）今やうは
をさ〳〵なべての人の今はこのまずなりゆくもの
なればなかめづらしくあはれにきこゆ松風をいと
よくもてはやす吹あはせたる笛のねに月もかよ
ひてすめるこゝちすればいよ〳〵めでられてよひ
まどひもせずおきゐたり女は（大尼ノ詞）むかしはあづま
ごとをこそはこともなくひき侍しかどいまの世
にはかはりにたるにやあらん此僧都の聞にく
し念仏よりほかのあだわざなせそとはしたなめ
られしかばなにかはとてひき侍らぬなりさるは
いとよくなることも侍りといひつゞけていとひか
まほしとおもひたればいとしのびやかに（中将）うちわらひ
ていとあやしきことをもせいしきこえける僧都
かな極楽といふなる所にはぼさちなどもみなかの

かるあそひをして天人なともまひあそふこそたうと
かなれおこなひまきれつみうへきことかはこ
よひきゝはへらはやとすかせはいとよし（大尼ノ心）と思ひて（ぞ）
いてとのもりのくそあつまとりてといふにもしはふき
はたえす人々はみくるしと思へと僧都をさへうら
めしけにうれへていひきかすれはいとおしくて
まかせたりとりよせてたゝいまの笛の音をもた
つねすたゝをのか心をやりてあつまのしらへを
つまさはやかにしらふみなことものはこゑやめ
つるをこれをのみめてたしと思ひてたけふちゝりちゝ（タリタンナチリクイニ）
りたりたむなとかきかへしはやりかにひきたる（唱句ノ）
詞ともわりなくふるめきたりいとおかしういま（中将ノ詞）
の世にきこえぬことはこそはひき給ひけれとほむれ
はみゝほのほのしく（タモカナフスヤ）かたはらなる人にとひきゝて今（大尼ノ詞）
やうのわかき人はかやうなることをそこのまれ
さりけるこゝに月ころものし給ふめる姫君かたち
いとけうらに物し給ふめれともはらかゝるあた
わさなとし給はすうもれてなん物し給ふめると我（我カシコシト思テ也）
かしこにうちあさわらひてかたるを尼君なとはかた
はらいたしとおほすこれにことみなさめてかへり
給ふほとも山おろしふきてきこえくる笛の音はいとおかし
うきこえておきかありさてくろつやめそよ人も

ふかく・しもうらみ給はしいかゝ見まつらく侍し

中将
わすられぬむかしの事も笛竹の
つらきふしにもねそなかれける（文ノ詞）なほすこしおほし（よ習に）しるはかり
をしへなさせ給へ忍はれぬへくはすきすきしきまて
もなにかはとあるをいとゝわひしらむなみたくと
とめてく昔ならけしきまてのきのふ

尼
笛の音に昔のこともしのはれて
かへりしほとも袖そぬれにし（よ習ハ世シラヌ人カト大尼上ノトハズ語ノコトクト也）あやしうもの思ひしらぬにや
とまてみ侍るありさまは老人のとはすかたりに
きこしめしけんかしとあるもめつらしからぬもみ
所なき心ちしてうちおかれにけんかしをきのはに

をとらぬほとほとにおとつれわたるいとむつかし
うもあるかな人の心はあなかちなる物なりけり
と見しりにしをりをり（兵ワノ宮ナトノ事也）もやうやう思ひ出るまゝに猶
かゝる筋のこと人（尼ニ云給ヘル也）にも思ひはなたすへきさまに
とくなしたまひてよとて経ならひてよみ給ふ心の
うちにもねんし給へりかくよろつにつけて世中を
思ひすつれは若き人とてをかしやかなることも
ことになくむすほゝれたる本上なめりと思ふ
かたちのみるかひありうつくしきによろつのとかみ
ゆるして明暮のみ物にしたりすこしうちわらひ
給ふおりはめつらかにめてたき物に思へり九月に

なりてこのあま君はつせにまうづとしころいと心
ほそき身にこひしき人（尼ノムスメ）のうへもおもひやまれさりし
をかくあらぬ人ともおほえ給はぬなくさめを得
たれは観音の御しるしうれしとてかへり申たち
てまうて給ふなりけりいさ給へ人やはしらんとす
るおなし仏なれとさやうの所におこなひたるなん
しるしありてよきためしおほかるといひてそゝ
のかしたつれと昔（ウキノ心）はゝ君めのとなとのかやうに
いひしらせつゝたひ〳〵まうてさせしを
かひなきにこそあめれいのちさへ心にかなはすたくひ
なきいみしきめをみるはといと心うきうちにも

しらぬ人（尼ニ）にくしてさる道のありきをしたらんよ
とそらおそろしくおほゆ心こはきさまにはいひも
なさて心ち（ウキノ心）のいとあしうのみ侍れはさやうなら
む道のほとにもいかゝなとつゝましうなんと
のたまふものおちはさもし給ふへき人そかしと思ひてし
ひてもいさなはす

（ウキ舟）はかなくてよにふる河のうきせにはたつねも
ゆかし二本の杉とて手ならひにまし（亦云ク手習ノ仏トハ取チカヘテ也）りたるを尼君
見つけて二もと（尼ノ詞）は又もあひ見えんと思ぬる人ま
へしやたはふれことをいひあてたるにむねつふ
れておもてあかめ給へるもいとあいきやうつく

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

きけなり

（尼公）ゆるはの秋のりしあらしかねとも昔見し人（尼ノ娘）ふよそへてそみることとすくなしとすさいし人を（尼ノ）くらやくいよ思ひてとい色どもこれ人をさひけしあくまむ人ぞく（まゝノ）おもしくおもしきんをひくしぐらしなどしてむねあるかたのわさなど心ひとつにたれかれとうちしえ人まうへびはのうとく（小少将）めさなけるみかいくちにけ影をなりのめ出して（方上ノ）わさまし気事とおなりつも今（浮舟心）やいくむさんことな（今ノ尼ニシテ朽ム人トセ）めきし人よ思ふ人ひとつに拘し深くねをひぼそくもまうれといやつれくなりけるを中ねの語文あり語んぞよせい色ども（手習ノ）まくとい連語

なぜいとじ人もみえずつれくとさしくさかされ誠思ひし紡（中将尼ノ詞）くるしきまてをなりのめさうをぬふうある詞甚うらくを語へといふ心とあやしうこうまあらしうやもむの（浮舟ノ）語色どうふんさむほしなま連あらんようにやつて我つふて思てあんせさ変なそさうちさうまいとあつれ其其文てあてしてらいあやう色とう（尼君ノ詞）う色ちをぬんなんこれ語文つへを奉んのの語又ずいとも深よろうけ縁森の君堂（大）もうようりいうろうこれまを紡もいふうこうすとお思しもかるか誠いとき世いたとくまなりて語しいそくしううさくらめ語文まむ（ハ）内いりしをやまと語ひしまは語いま

僧都なむふたつまけさせ給ひしこせいの碁にはま
さらせ給ふへきなめりあないみしや（少将ノ詞）とけうすれはさた
すきたる尼ひたひのみつかぬに物このみするにむつかしき
ことをしそめつる事もしあてけるかなと思ひて心ち
あしとてふし給ひぬ時〻（尼君ノ詞）ははれ〳〵しくもてなし
ておはしませあたら御身をいみしうしつめてもてなさせ
給ふこそくちをしう玉にきすあらん心ちし
侍れといふ夕くれの風の音もあはれなるに
思ひいつる事もおほくて

（手習）心には秋のゆふへをわかねともなかむる袖に
露そみたるゝ月さし出ておかしきほとにひる文あり
つる中将おはしたりあなうたて（浮舟ノ詞）こはなそとおほえ
給へはおくふかく入給ふを（少将尼ノ詞）さもあまりにもおはし
ますかな御心さしのほともあはれまさるおりにこ
そ侍めれほのかにもきこえ給はん事をきか
せ給へしみつかんことのやうにおほしたるこそな
といふにいとうしろめたくおほゆおはせぬよし
をいへとひるの使の一所なととひきゝける
なるへしいとことおほくうらみて（中将ノ詞）御声もきゝ
侍らしたゝけちかくてきこえん事をきゝにくゝとも
おほしことわれとよろつにいひわひていと心う
く所につけてこそ物のあはれもまされあまりかゝるは

ふけにけるとしめ給へ
（中将）山さとの秋の夜ふかきあはれをも物思人は
思ひこそしれをのつから（中将詞）御心もかよひぬへきを
なとあれは尼君（尼君ノ詞）たいめてまきらはしきこえ給へ
人まねひいやよりあるやうなけれとせむすへき
（手習）うき物と思ひもしらてすくすみを物思ふ人と
ひとはしりけりわさといふともなきをきゝてつ
たへきこゆれはいとゝあはれとおもふへしいさゝかう出
給へとこのしうとの君やあの人々をうらみはきこえまて
うらみ給あやしきまてつれなくそみえ給やとし
いりて見えましてまねふのつまそめつゝさえのそこ給

まゐおは（大尼）人のほとふかりせ給はすなりあさましう
思てうくるんやきこえまへ（中将詞）かくれ所なはなのある給
らし世の中のあはれは大かたのありさまなとし
をなけきはなかりけるましく人のいそあまりにきこえしぬ
人しらてこそ見けれはそてすし給のあしやうまてをとゝめしそ
むかしへ家のかくそいのなくさめに世経らうみてい
けまそおもひする事ま人そなとかくさゝめとひてゆう
まけみのこともおほつかなれとあまりのあまりまいりかて
かそりひきかくれ（尼君ノ詞）ふくしもさとし給へき人の年
ころもうしくしさ麗うのそてすくしの哉よつ
御まへゝくあひ給くおつねやし給へ取とそいふ

姫君（ウキ）はいとむつかしとのみきくおい人（大尼）のあたりに
うつふしふして（くイ）いも寝られすよひまとひはえもい
はすおとろ〳〵しきいひきしつゝまへにもうちす
かひたる尼とも二人ふしておとらしといひき（面白詞）
あはせたりいとおそろしうこよひこの人〳〵にや
くはれなんと思ふもおしからぬ身なれとれいの
心よはさはひとはしあやうかりてかへりきたり
けんもののやうにわひしくおほゆこもき（女童）ともに
ゐておはしつれと色めきてこのめつらしき男
のえんたちゐたまへるかたにかへりいにけりいまやくる〳〵
とまちゐ給へれといとはかなきたのもし人

なりや中将いひわつらひてかへりにけれはいと（尼トモノ詞）
なさけなくむもれてもおはしますかなあたら御かた
ちをなとそしりてみな一所にねぬ夜中はかり
にやなりぬらんと思ふほとに尼君しはふき（よイニ）おほ
ほれておきにたりほかけにかしらつきはいとし
ろきにくろきものをかつき（いめイ）てこの君のふし給へる
あやしかりていたちとかいふなる物かさるわさ
するひたひに手をあてゝあやしこれはたれそと
しうねけなるこゑにてみおこせたるさらにたゝ（浮ノ心）今
くひてんとするとそおほゆる鬼のとりもてきけん
ほとは物おほえさりけれはなか〳〵心やすしいかさ

まふあれや御ゆるしなきまでいみじきを猶
まくいふかひなき人になりてまゐらせしてのかくのうらみ
あら給思ふられむほしともそゞろしとも猶を
思ふよし（死）なしすゆしかしあまたはらもなしけなる
もみちくなけつれにこゝろをわりしまつやかて思ひ至り篇當（うまん）
よりのこと給まどろまれねまでにつけよりを思
ひはなくおはしけるをゆかしきおやとかくきこえ人の涙
かたちもみるとてさへつくりけるも猶すゝめ給はず
あらう給ひとし月を持ちてなき行つまるよりて
つまし給のめしやさやかにまうのゝうれいあゐそつき
もおはすらくさ（元）くまいを（四）さまうてなまことさるくか給人

まし人（わり）は惜をてやゝく力のうきさをおぼくれのゐ
あきくやめにわさましりかくうしくるひくる力と
しひゆきをしな（白）とすうしもあはれとおもほしあれむ
ずいやしきのうぬそくこの人の（白）はゆるしふさすう
あめるかや思ふべしあまのみちとあそしは契りし
をなとてをかしう思ひあはしきれとあはれくあるさ
みこゝろちゝひはしめまうすれなりけるもおぼえや
うかりのしめ給ひとぞあめのおぼえつのおもはなし
思ひかけずふかゝりあるゝゞけなくてこゝろざし
やまふつあられましうまつりこと人にまじはりまうさ
おほかたしなきのふは世にあるまじき御さかえ（わか）をとりて

なからたにいつかはみんするとうち思ふなほわろ
の心やかくたに思はしなと心ひとつをかへさふ
からうして鳥のなくをきゝていとうれし母の御声
をきゝたらんはましていかならむと思ひあかして
心ちもいとあしう供にてわたるへき人もとみに
こねはなほふし給へるにいひきの人はいとゝくおきて
かゆなとむつかしき事ともをもてはやして御前に
とくきこしめせなとよりきていへと
まかなひもいと心つきなくうたて見しらぬ心ちして
なやましくなんとことなしひ給ふをしひて
いふもいとこちなしけすけすしき法師はら

なとあまたきて僧都けふおりさせ給ふへしなとに（尼氏ノ）
はかにはととふなれは（法師ノ詞）一品の宮の御ものゝけに
なやませ給ひける山の座主御修法つかうまつらせ
給へと猶僧都まいらせ給はてはしるしなしとて
きのふ二たひなんめし侍し右大臣（夕霧ノ子）殿の四位少
将よへ夜ふけてなんのほりおはしまして后（明石）の宮の
御文なと侍りけれはおりさせ給ふなりなといとはなやか
にいひなすはつかしうとも（ウ手ノ心）あひて尼になし給ひてよ
といはんさかしら人すくなくてよきおりにこそ
と思へはおきて（ウ手ノ詞）心ちのいとあしうのみ侍る
を僧都のおりさせ給へらんにいむ事うけ侍らん

いとかん思給へとさ座うるやうし給色とくゝらひ
めへやはぶきくしうらうと（大尼）ほく給へかくまかせ
はしてうこ尼居こゝのみ笛つゝ給へとし人まち
かれさきんもうさてあそびまていひし（将）あそびも
をあふしりれでふまうしとさらぶして物やは
のたまひ一さひつうなげゞのさ海みさしびなりなん
まう人やうなしびいとるしけまいりげう
ひしけはやうこゝろそこしおちあそそつまふるもの
すればなふがうとも打ろくぞいや物くそ台（青ハ皆め云 ミヤン）尺計
なりたすとなはかりぞいうつくし物りけらゞらなる
こゝやとあまりのにようつくしけやうへ（字ノ）く遣とてしりし

ひとりごちぬ給へつましれかくては僧都物し給へるを
みなつえ物もてりにひたつひそまろなりぬしう
ほえどもちらしひきかへしはやりかにひくもまてことはつまく
いやしおそろしきけちす（大尼）きくのほゝくる事わめて
（侍従ノ詞）りうりそ月ごろそなやいふ東乃ほうくむ物まう
でし給よさしとおこれ物しきし人（うキ）をさくと物し給や
かとくひのふ（大尼ノ詞）志うあくふとまるてなん山ちあ
とこうそのしのそいぶことしけなうむとの給へ
ねとさく笛ふらてこあさくまいましてあくまやれ
ちしまゐとえし几帳のりとにつねく（居）釣へ（不意）事ほく海
志けまでとぬざうしきてりゝ色し給へみ（侍従ノ詞）いまくみ

てまつりそめてしもさるべきむかしの契りありける
にこそと思ひ給へて御いのりなどもねんごろにつかう
まつりしを法師はその事となくて御文きこえうけ
給はらむもびんなかりければじねんになむおろかなる
やうになり侍りぬるいとあやしきさまに世をそ
むき給へる人の御あたりにいかでおはしますらむ
との給（法ノ詞）世中に侍らじと思ひたち侍りし身のいとあや
しくて今まで侍りつるを心うしと思ひ侍る物からよろ
づにものせさせ給ひける御心ばへをなむいふかひ
なき心ちにも思ひ給へしらるゝを猶世づかずのみ
つゐにえとまるまじく思ひ給へらるゝを尼になさ
せ給ひてよ世中に侍るとも例の人にてながらふ
べくも侍らぬ身になむと聞え給へば（僧都ノ詞）まだいと行さき
とほげなる御ほどにいかでかひたみちにしかは
おぼしたゝむかへりてつみある事なり思ひたち
て心をおこし給ふほどはつよくおぼせど年月
ふれば女の御身といふ物いとたい〱しきものに
なむとの給へばをさなく侍りしほどより物をのみ
思ふべきありさまにて親なども尼になしてや見
ましなどなん思ひのたまひしましてすこし物思ひしり
て後は例の人ざまならで後の世をだにと思ふ
心ふかゝりしをなくなるべきほどのやうやうちかく

なり侍るや心ちのいとよはく成侍るをなをい
かでとてうちなきつゝの給あやしくかゝる（僧都ノ心）
さまありさまをなどて身をいとはしく思はじめ給けん
物のけもさこそいふなりしかと思あはするに
さるやうこそはあらめ今までもいきたるへき人
かはあしき物のみつけそめたるにいとおそろしく
あやうきことなりとおぼして（僧都ノ詞）とまれかくま
れおぼしたちての給ふを三宝のいとかしこくほめ
給ふことなり法師にてはきこえかへすへきことならず
御いむ事はいとやすくさづけ奉るへきを
きうなることにてまかでたれはこよひかの宮にまい
るく侍りあすよりや御ずほうはじまるべく侍らん
七日はてゝまかでんにつかうまつらんとの給へ
ば（うき舟ノ心）かのあま君おはしなばかならずさまたげてん
といとくちおしくてみだり心ちのあしかりし程
に乱るやうにていとくるしく侍ればおもくな
らばいむことかひなくや侍らん猶けふはうれ
しきおりとこそ思給へつれとていみじうなき給
へば（僧都ノ詞）ひじり心にいといとおしく思て夜やふけ侍
ぬらん山よりおり侍ることむかしはことゝも思給
へられざりしを年の老はてにはたへがたく侍け
ればうちやすみて内へまいらんと思給へるを

かなかしいそぐなれどもみな侍りまゐりてこそと
の給ふまゝにいとゞものなれ〳〵しきまでさぶらふ
のちこのさうしの宿直宿直人いはしたとくさぶら
あしさらふを宇治（しゝう）みつ番をはなしまゐてなりけり
や供もなかりけれはびいれく源じおかうしをれや
りよけはいみしかう人々の御ありさまなれど
つし人まくやすからずふしきさんとうるてもあらめ
やこれあづまこゝろある思ふに末すのうてひし
のおこころひとをぬのことをうたがひし源へさうらいと
かうしをそうしげなるすんだちもさみえと
ことやすらひけるかゝれどかねのわさなむせう

とのかざりはいと頭によくあひて末もすじおほく
末つぎをこれはくしのしもより人にはわゑてらふ
やてこゝろ殊にほそてきみ家とおくにむかせの人
人めつらしくそのくれさふらはるゝれ気こよし常
院見のまなとし侍る程なるあさ気ひさまとしもわくな
あやたれとかねの尼にほしきをはりかれまてひそ気
すみつゝまちの御色代家けさなとゝあさとゆう八
おもとてこまをなしおはしておやの侍あそをさきあり
源へとりよまゐりつかくともこゝろなさらもえも思
あ人新女てなれ源になり少内うれわさ侍しやなとか
のとあふるなるむざとやせざ妻のよう尼色昊へまてみたり

てきひのなかるそゝ紙の端きなんといふ色紙のつゐり
にしそめつゝおきといひ人ゝなきも持や思て僧都
いはむかたくぞしもりてもえさあはさずゞ家将三条中
などいふまことにさらにてゝし相をとふづけなを
ゆゑづなりけるはゞしをうざまつるのくはゞや
りお尼君さらしてまくとさをめへといふひたひを
僧都うし覚侍ふりくろはくさらやはしめてくひ
侍ふなくどうとら事どもときてゝ世侍ふとを
にえせさすべくもあらずこれはひとしをかの事を
すましくわしつれうかやうきのこと佛いゝける
をかしくおほけしのあるこれ人ゝはいでてつかまつる
めよるの風は若ゝこの人ゝおもひあそびてきはすゝ打
も忘れじ人のあそしぞ今いやめでたくなり給ひすゑ
とかの尼宮し侍る所ゝにとうくしかきを折くのこ
思ひかゝる所のすゝとりつゝきを姿のうつくしと
まうでおほいやる人ゞふ今をかぎりと思ひ
まてしられくやとうあしきまぎふゆらといひし
すれやなくいさしむやをくられしよみぬべき
猶ともこのあびなかめるもいやかなじくれ事
なまよしものゝおきさうらし侍ける明ものそ
きのをけふむとぬ語るきぬこともなれむかしもた
らむのりみるんとおもなづしかをつゝもすそれ

縁におれどもまうやすくにしどけなくゆく人ありけれ
たゝとみつゝし花おやくもいまではくろりし人
ことうれとなふどもふけきくもけくましくらう
ときておもす思ふことを人ゝりひけくけん
あやしのなぶりしとらりなふなくとうしなかとか
いそしなつゝしくことはけるつれ人ゆくおなれぞさく
まぐつらふしやうひまくに何まうおもすぶてなるひと
のこ為けむあやしくて文ほど語

ほ
たけき御は力をも人とも思ひけくもてくし世
をぞゆしは捨てける今はうくてうぶゝまけるうし
世のさてもれかつのうむいとあそれさ口入語

円
うちゑみてや思ひなりけり一筆をくへまくさそ
むかしぬるのれおもしきぶ乃ことはやのくつあ
さひぬ給へおは中ね乃ほし文うりの物さらくぞれとあ
きれゝるなりしあへ当ねまて元れましすんと（元花カ同）
りひてなつてはいとあへなしと思ひくるらのふみ（中わノん）
あつけり人なりとれほうのかなりしかをとしつか
おどと思ひちあれならさりさても何色もされまざ
うおゆやれうりをみしうこの顔をそしてふみ
せよこ一夜をうくらひしらかはりゆらべうしれおもと
うしいひし御をもいやくくちれしくてさらつ色もり
やみし笑りてなさとそ

（中将）きしとをくこきはなるらんあまふねにのりをく
れしといそかるゝかなれいならすとりてみ給（ウキノ）ものゝ
あはれなるおりにいまはとおもふもあはれなる物から
いかゝおほさるらんいとはかなきものゝはしに
心（ウキ舟）こそうき世のきしをはなるれとゆくへもしら
ぬあまのうき木をとれいの手ならひにし給へる
をつゝみてたてまつるかきうつしてたにこそと
の給へとなかなかかきそこなひ侍りなむとてやり
つめつらしきにもいふかたなくかなしうなむお
ほえける物まうての人かへりて思ひさはき給事かきりなし
かゝる御身にてはすゝめきこえむこそはと思ひな
し侍れとのこりおほかる御身をいかてへ給
らんとすらんをのれは世に侍らんことけふあす
ともしりかたきにいかてうしろやすくみたて
まつらんとよろつに思給へてこそ仏にもいのりきこ
えつれとふしまろひつゝいといみしけに思給へる
にまことの親（ウキノ心）のやかてからもなき物と思ひ
まとひ給けんほとおしはかるそまついとかなし
かりけるれいのいらへもせてそむきゐ給へるさま
いとわかくうつくしけなれはいとものはかなく
そおはしける御心なれとなくなく御そのこといそき給にひ
色はてなれにしことなれはこうちきけさなとしたり

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

したりある人々もかゝる色をぬひきせたてまつるにつけて
もいとおぼえずうれしき山里のひかりと明暮見
たてまつりつる物をくちおしきわざかなとあたらし
がりつゝ僧都をうらみそしりけり一品の宮の御な
やみげにかのでしのいひしもしるくいちじるき
事どもありておこたらせ給ひにければいよ〳〵いと
たうときものにいひのゝしる名残もおそろしと
て御修法のべさせ給へばとみにもえかへりいらで
さぶらひ給ふに雨などふりてしめやかなる夜めして
よゐにさぶらはせ給ふ日比いたうさぶらひこうじ（クタビレシ）
たる人はみなやすみなどして御前に人すくなに
てちかくおきたる人すくなきおりおなじ御帳に
おはしましてむかしよりたのませ給ふ中にも
（大宮ノ詞）此たびなんいよ〳〵のちの世もかくこそはとたのも
しき事こそまさりぬるなどのたまはす（僧都ノ詞）世中に久
しく侍るまじきさまに仏もをしへ給へる事ども侍る
も侍るうちにことしらいねんすぐしがたきやうに
なん侍りければ仏をまぎれなくねんじつとめ侍らん
とてふかくこもり侍るをかゝる仰事にてまかり出侍
りしなど啓し給ふ御物のけのしうねき事さま
ざまになのるがおそろしき事などの給ふついでに
（僧都ノ詞）いとあやしう希有（ニシテナルコト）の事をなん見給へしこの三

月ごろ年老いて侍る母の願ありて初瀬にまうでゝ
侍りし帰さの中宿りに宇治の院といひ侍る
所にまかりやどりしをかくのごと人すまでとし
へぬる大なる所はよからぬものかならずかよひ
すみておもき病しやのためあしき事もやと思
給へしもしるくてそのみつあたりしまゐくを
と聞侍りし給げにいてめげらのなるあとのれよて
ちうくさふらふ人〳〵みなねいりたるにそこなる
ゐなかされてはうさせぬおもねのくらひ給ふ家あれ
あさましき事ゝききつけてなむまかりし給ひける人々
なむなきさまを僧都もさらにさらにえしらず侍りし

なきまゝの事共ありしてなりと思ひくだして猶も

事ゝとていひ侍りつるの女人（僧都ノ詞）はさいはひのほど出給へる
れ侍は小野に侍りける尼共あひとひ給ふ世にて候
なるともなりさかしふかく出家のほいふかきよし
念はねてくらひ給ひつるそのしらなる給すゑ
にりしうい、ありとも未来のつとめのためにも給しあなる
らんうちをすし母君のちからなく思ひよわり給
てまいらんずるにいとつよく給ふなる気色にて
おはせるうちへ人や事につけてきこえられ侍りし
ほどけり候へくあやしれひやりまへんとて聞けれ
なむ給しなかに人まうち給あへて猶よりくわしく僧都に

てあつかひ侍しま申給へは（宰相ノ詞）いかてさる所によき人
をしもとりもていきけんさりとも今はしられぬらん
なとこの宰相の君そとふ（僧都詞）しらすさもやかたらひ
侍らんまことにやんことなき人ならはなにかかく
れも侍らしとやゐ中人のむすめもさるさましたる
こそは侍らめりうの中より佛生れ給はすはこそ侍
らめたゝ人にてはいとつみかろきさまの人にな
なん侍りけるなときこえ給ふそのころかのわたりにきえうせに
し人をおほしいつこの（宰相ノ君）御前なる人も
（中ノ君ヘノツタヘニヤ）あねきみのつたへにあやしくてうせたる人とは
きゝおきたれはそれにやあらんとおもひけれと定めなき

ことなり僧都もかゝる人なん世にいてたるとも
しられしとよくもあらぬかたきたちたる人もある
やうにおもむけてかくししのひ侍るをことのさまのあ
やしけれはけいし侍るなりとなまかくすけしき
なれは人にもかたらす（后宮ノ詞）宮はそれにもこそあれ大
将にきかせはやとこの（宰相ノ君）人にそのたまはすれといつ
かたにもかくすへきことをさためてさならんと
もしらすなからはつかしけなる人にうちいて
のたまはせんもつゝましくおほしてやみにけりひめ
宮おこたりはてさせ給て僧都ものほりぬかし（小野）
こによりたまへれは人々もいみしくうらみて（尼ノ詞）なかなか

かゝる御さま[illegible]人きましとの給ひも
[illegible]けることゝもいやしなきことなれ
給へとかひもなし今[illegible]ひとし行へ
おはします[illegible]世なりけり[illegible]物よ
[illegible]法力とやとの給は
[illegible]おほしけるは[illegible]
[illegible]相[illegible]とうふくの
まつりたんなふうおほしまつりめくへき[illegible]の世に
おもひ出て世の中の栄花にねひまさりは[illegible]
なん法[illegible]人もおかみそへりつめ

[illegible]林の中に[illegible]ひつゝ[illegible]
えうち[illegible]もおほえすこれは
らん[illegible]入りてすきこもりとかひをうせて松
の[illegible]月[illegible]細すと法師なれとかひとよ
らしくうちくしけなる[illegible]までの行ましとをと
を思ふ[illegible]ひ給ふを[illegible]まきぬる
はべるかな世もすゝ[illegible]風のをともいと心ほそきに
[illegible]人も嵐山の[illegible]なる
[illegible]もいと我もいそ[illegible]山[illegible]
[illegible]と思ひ[illegible]の
[illegible]行ける[illegible]とさめ

すゞく多くよろしきまでまてみる西山色のほう人也
とてもこゝろの色りましかよふ人もいやしなき法の
なりくろ爲とりいふてくところありを法師のもと
のこまれくきみ申すと給のきりの母みる昔さら
きあいなくめづらしきふあの婿ひとり中将なり
常うひなき事もいとこれとてりのしさら何つ給
あ家れいし程もしろくあらのくれなゐは濃まて
まさる色さすれとも入くれよろづ容姿なりけるあく（中将何）
ましきやもちらはけなる人をこのきこうハいやし
くそ見も中つかなとしみくいと（中将何）まのあくつれくなり
我もちりつゝも家をいふとしみ給くすれぬ給

さらの人を損ねもしつるままにこれのしふしをもてしみ
はじめの人は尼君みれは入なきみてもろりて
（尼）このうしろ家まし山のおりしよきりあく
若人實の母尼ふるなれとものゝ人を
（中将）まつ人もめつらしや思ふ山里のこすゑをこほく
なせそ色をよいよつひなき人の法を紙折經
きんの法てさ後のもれ法へらし法もといさらう
みせよとかねの尼との法をれそうさ契しさるし
みせよしきあの人きりてみるゝあさものしまを
人まで申きまりしさき南してそおもちすもらをはじ
いろのあやなりりままきんあつなりとなきこうな

をふていひしらすやうに成うす給ふしもとの給ふさ
ぬ心ちまさりと又ゐめのよ三経ひろあさうや
うまこちしけれすも侍えすりあまりにうつしえ
おもやうの事さうをいふしくもしんやうまめ
うく白ひ給ひあれひたくとし給まを枕もとに置
をまれ帳のおもて給もしくといまてよそのく給
忌のまとうくさはしう地（ち）みなことふ殿のとあらく
近山ちまうをさめく心のあぬこん男君のまみ
なりぬ思ふくさうくまおろしやまさへ成うしれ
かあのうのりしにわさそうれ試そしつくまつさ
近く三本下なとそしやりちまいは（中将ノ君）しるくまさきさ

ことあつかしのいふし思ふさ過なかりける人々ととも
まうちきこえん行やすらの御うには物しくやしも
かるしそれはけくみもあへそそのくらましまて
けしひもさこしめくそれはのさゑのりのさ通し
まらんとうしうひて為ぬ人わりけん悪まくその
人のひとしの辺とあまそんゆるしもしすかくれは
たらめし母ものこし世はなれうむさうけるり
なといふこともつゝくれなりのなつかしけれはなきと
かやしき人へまく思ふ尼なりともあられさまに
さらん人をうらみてもおほしなくてなく見給ま
さて御けくうしるつゐを思ひさ侍よまち経

かたらひやりてんと思へど、まめやかにかたらふ
（中将ノ詞）世のつねのさまにこそおぼしはゞかることゞもあり
けんを、かうさまになり給へるなん心やすく物
きこえつべく侍る。さやうにをしへ聞え給へ。こし
かたのわすれがたくて、かやうにまうでくるに、又今（み）
ひとつ心ざしをそへてこそなどの給ふ。（尼ノ詞）いとゆくすゑ
心ぼそく、うしろめたき有（あり）様に侍るに、まめや
かなるさまにおぼしわすれずとはせ給はん、いとうれ
しくこそ思ひ給へおかめ。侍らざらん後なん、あはれに
思ひ給へらるべきとてなき給ふに、この尼君も（中将ノ心ウキ舟ト尼ト別而近キ中カト也）
はなれぬ人なるべし、たれならんと心えがたし。行
末の御うしろみは、命もしりがたく、たのもしげな
き身なれど、さ聞えそめ侍りなば、さらにかはり侍ら
じ。たづね聞え給ふべき人は、まことに物し給はぬか。さや
うのことのおぼつかなきになん、はゞかるべきことに
はあらねど、猶へだてある心ちし侍るべきと
の給へば、（尼ノ詞）人にしらるべきさまにて世にへ給はゞ、
さもや尋ね出づる人も侍らん。今はかゝる方に思ひ
かぎりつる有さまになん。心のおもむけもさのみ見え侍
りつるをなどかたらひ給ふ。こなたにも
せうそこし給へりつ
（中将）おほかたの世をそむきける君なれどいとふによせて

らせてかしもつゝけ給へりけんしやうかうのかく中将
おとなしおかれひつゝふるきのうやおほしめし給
せちられきこえの物語なとゝもきこえてなくさめん
なとりひつひつゝん（浮ウキフ子ノ母）娘うしらん法よのすゞらなとゝきこえて
よく思ゝくとあはぬしもくらおしけまていと色て
このいやふる法師さらゝ人ぞし給はで思よりひ
めさましく気ことゝもましかるれもいてうとましきを
つくら本なとのやうまく人（あの白母ナトニ）ますてられてやと
なんとかくすし給ふされさ月しろさ中をなくむ
すゝしき道のとのゝおほしなゝしもちのおいの
ことしめて後よりさまをこうしけ道くしそ成て居志

とかうなけくたちふれもちかうそし甚うちなけゝして
すはうしくしめをこなひもいとよくして法花
経はさる也こと法文なともいとおほくよみ給
雪ふかくふりつみ人めたえたるころそけに思ひやる
かたなかりける年もかへりぬ春のしるしもみえ
す氷わたれる水の音せぬさへ心ほそくて君にそ
まとふとの給ひし人は心うしと思ひはてにたれと
なをそのをりなとのことはわすれす
（手習）かきくらす野山の雪をなかめてもふりにしこ
とそけふもかなしきなとれいのなくさめのてな
らひをおこなひのひまにはし給ふ我世になくてとし

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

たゝりぬるを思ひいづる人もあらんかしなど
思ひいづる時もおほかりわかなをおろそかなる
こにいれて人のもてきたりけるを尼君みて
尼
山里の雪まのわかなつみはやしなをおひさ
きのたのまるゝかなとてこなたにたてまつれ給へれ
ウキ
ば雪ふかき野への若菜もいまよりは君かため
にそ年をつむへきとあるをさそおほすらんも哀
なるにもみるかひあるへき御さまと思はましかはと
まめやかにうちなき給ふねやのつまちかき紅
梅のいろも香もかはらぬを春やむかしのと
異よりもこれに心よせのあるはあかざりしにほひ

のしみにけるにや後夜にあかたてまつらせ給ふ下らうの
尼のすこしわかきがあるめし出て花おらすれば
かことがましくちるにいとゞにほひくれば
浮
袖ふれし人こそみえね花の香のそれかとに
ほふ春のあけぼの大あま君のむまごの紀伊守なりけるか
このころのぼりてきたり三十ばかりにて
紀守カ詞
かたちきよげにほこりかなるさまなり何こと
かこぞをとゝしなどとふにほけ〳〵しきさまなれば
紀守詞
まへこなたにきていとこよなくこそひがみ給ひに
けれあはれにも侍るかなのこりなき御さまをみ
たてまつる事かたくてとをきほどに年月をすぐし侍る

らおやたち物し給はてのちは一所をこそ御かはりに思ひきこえ
つれひたちの北の方はおとつれきこえ
給ふやといふはいもうとなるへしとし月にそへ
てはつれつれに哀なる事のみまさりてなんひたち
はひさしくをとつれきこえ給はさめりえまちつ
け給ましきさまになんみえ給ふとの給にわか親
の名とあいなくみゝとまれるに又いふやう
まかりのほりて日ころになり侍るをおほやけ事の
いとしけくてむつかしき程の事にかゝつらひて
なんきのふもさふらはんと思給へしを右大将殿の
宇治におはしましゝ御ともにつかうまつりて故八宮
のすみ給ひし所におはして日くらし給し故宮の
御むすめにかよひ給しを先一所は一とせうせ給に
きその御いもうと又忍てすへたてまつり給へりける
をこそのはる又うせ給にけれはその御はてのわさ
せさせ給はん事かの寺の律師になんさる
へき事の給はせてなにかしもかの女のさうそく一
くたりてうし侍へきをせさせ給てんやおらす
へき物はいそきせさせ侍らんといふをきくにいかて
かはあはれならさらん人もこそあやしとみれと
うしろめたくておくにむかひてゐ給へり尼君かの
ひしりのみこの御むすめは二人とききしを兵部卿

宇のわれかくていけまじうやのなさへず（紀守曰）これみまね
とかくみめちの事をやうてはかなる色しあとくし
くも尊てあしゝ給ひさぶらひけるかばいみじくかなしひ
治なればは（姉君）じめのことゝいふことをえにくくすけと（出家）
志給ひ侍へるを気のしなゝてえ（浮ノ公）のうのわうきの
とゝしいひ人なればけりとみくつゝも（双地）あそぶおもうし
めやしきや（碧ヤノ）うのそのとうしこゝくしとうき給ひ
けつまじきのみをいとふゝひんまつしうあ河を入
とらるまて此そのぞえ治くいゝしやきまう紀治ひ入
うるかのかつかぬひぞしらしまうみけるそし
みし人はかげもとまらぬ水のうへにおちそふ

なみだいとゞ世気あへずとなん御ことゝふあう
まして治ましまろくかけまをさくけしなましえ
ひとやられなり給さ南まなはをみしのし女をいゝえん
しくみてまかりぬくるんとのく御しめときゝりう
みたりしてとみさくきうりをまししこを世中
の十（仁平）の所をなふとも里御しすゝこの殿をとゝ人
みやしゝうをてなんすゝし御ぬるとかゝ給（ウ手ノ仁）まいらふ
うゝ気色もなければこのなうの人（紀守）ずふきゝあるさ御
をみつらまはるゝと思ふ尼ごさゝひのきみときゝこし
あれ世院の御うちさまにてみえなしひ給ひし也松
おゝ御許とみ给ゝの世には侍そゝのそらぬ給ぬ

右のおほい殿との給へは（紀伊守曰）それはかたちもいとうる
はしうきよらにしうとく（宿徳）にてきはことなるさまそ
し給へる兵部卿宮そいといみしうおはしますや女
にてなれつかうまつらはやとなむおほえ侍るなと
をしへたらむやうにいひつゝくあはれ（ウキフネ心）にもをかし
くもきくにも身のうへも此世の事ともおほえす
とゝこほる事なくかたりおきていてぬわすれ（ウキフネ心）給
はぬにこそはとあはれに思ふにもいとゝ母の御
心のうちをしはからるれとなかなかいふかひなき
さまをみえきこえたてまつらむはなをいとつゝまし
くそありけるかの人（紀守）のいひつけし（女ノサウゾク）ことゝもをそめ（染）いそく

をみるにつけてもあやしうめつらかなる心ちすれ
とりあへてもいひ出られすたちぬひなとするを
これ御らんしいれよ物をいとうつくしうひねら（ヒネリヘテヌフ）
せ給へはとてこうちきのひとへたてまつるを
うたておほゆれは心ちあしとて手もふれすふし
給へり尼君いそくことをうちすてゝいかゝおほさ
るゝなと思ひみたれ給ふくれなゐにさくらのおり物（紋アヤハ桜）の
うちきかさねて御まへにはかゝるをこそたてまつらす
へけれあさましきすみそめなりやといふ人あり

（手習）あま衣かはれる身にやありし世のかたみの袖
をかけてしのはんとかきていとおし（ウキフネ心）くなくも

まかりにし後は御のかくれなき世ならけれはあさく
めしせなからしてうとまてうくしけるとや
おもうらんなれとさ海くおもひちく宇（ウキノ君）君のみこその
事はたにしてますれ給ふをり庭うならんと紙衣
をしいうくるはしきをてこそわのうちあそれなまめき
おほかとうにの尼（尼ノ君）さうしやもおもひしいけふ中人ますに
のらんと侍気色をし見そく語らひて山うけまあしは
はかなかりけるのつみ此色うひなとひさしく見すれは
なれへすくとくしるを給はほまてとさしの人うちま
しらさなけとしのひその侍りくのあけのひやまし給はん
人世こしおもしましんやかくましてみ給しおふおり

いりこすりうらんゆへとせなふよらねきこえまほし
思ひ細くし給ふを打忍（すイニ）しして忘中し給人く給はん
うしろの給人まみ（ウキノ君）しおもひまてもおもひもえや物し給
きこえ月ころ物や思ふ給めしして住みそめの枕
つゝみをなくさめしくなりく思ひつるまつりけくう
よそ給ふともしうちゝめしいつくね面くハすかし
まうのあし給ふらんとみてもぞくなふの給なしつ大
将ハ二所までの蔵（更）なとせさせ給て大かれ成を
やうゝぬかうれとよもれはおかきその日さちの子
ことゝゑかりゝやりしうちむさ荒人はなしまうつはの
めさの（せうとイニ）うにはんさていゝんさにまうハ

はるかなるにさびしげなるもしほのくゆりのひなかる
さんとぞおぼしける須磨なとは海ちかくてきこえあや
なる浪あれみやこ遠くてへうしろはまへおもて
やうやう日かすへて須磨をなしかへしつゝかゝま
あやしき山かつやに年ふるまかきのつまのよにみゆる人
しく人のうちつき給ひしもさうざうしきまよひやわらはし紀
されをわれよりおとゝの事さへさなんあからさまの人
おほしける須磨ともあくかれしをところの内の
やゝむかしのひとなりふしのちむさみちをはる
けふむかし給はてひさしくなりしゆふぬさこん
つゞかもめくたよりすまのつまくちかなきらの
ありさまやうすこのさみてといはへしにうとう道心
おこなふすべくつくりをわまけひびつみのすまひの
やなん御思ひ給ひしとをりし給ふ彼妻おほしいそく
いそくそしけ道をうこまをかそうしきぬ物やもむ
られゆのやうまくかうの人をなくなりぬしとく
つかなるををす須給からひとかうをおほしらなう
や思ひてさもからんさやうの人をあれしうけあを
よのうかさのものむかすよをはる給ふとうせ
給ひし海るまいもわやしを給ふとてくさうしろを
やしめ大すなるとうく恋わらひとてあしふ
きりとおほ給ひんわいとおほしくおほされ宮れ物を

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号　ガラス使用

のみおぼしてうちのしろむも病つきとなりはじめ給ひぬ
しめやかなることをうかむしくるしくそうくく
はつまさみかなる大人のうへとおぼしとくめつ小宰相
みせひとちかねのひとの事くさしもあられむ思ふく
のめしをいとおしうてうらいぐはべるらしうやと
それはさとりくさ世物中人とけしきましてすん
きこそぞおとぐきくあしそりうつくやたんこと
そとうまあくしてある世しすんあむけるとたうく
の物明らまのけるでよ緒銀めひしましるくま
との給ふをひ侍まいまずまはくまをあんむとも叙
まかでてこよん人を給りでつやまやまさひまどさ御く

なけるむところ文まうらせいとをさなさもあはれ
やどりの侍りける疑もゆゑておきてしとみきてまつる
立よりて御経なとし給ひてまいらせ出給ひぬめりつる
のふいのつくりあやしとおぼしつれ給へあらし定
ひとりをせのしをつる事とほのおぼしけりてなり
をりなさるの御たをせさせつまつりまたやはりけまたう戒
をまつりしはしめよりいかにしさ御心とききこえ
さうらし給ひてしのびて後もなくとれあのまし家あく地
し人ゐすくかうさぬ御ほくあのまゐせ御車
説ことをきこうしのはくのへのあなたにし給
あるらとふうくまいらせ帯中明しすと思ひいり

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号
ガラス使用

この人（宰相）にもさなんありしなとあかした
まはんことはなを口おもき心ちしてなをあやしと思し
人のことに似てもありける人のありさまかなさて（かほノ詞）
その人はなをあらむやとの給へは（宰相ノ詞）かの僧都の山
よりいてし日なんあまになしつるいみしうわつ
らひしほとにもみる人をしみてせさせさりしを
さうしみの本意ふかきよしをいひてなりぬると
こそ侍なりしかといふ所もかはらすそのころの
ありさまと思ひあはするにたかふふしなきをま
ことにそれとたつね出たらんいとあさましき心
ちもすへきかないかてかはたしかにきくへきおりた
ちてたつねありかんもかたくなしなとや人の
いひなさん又かの宮（匂）もきゝつけ給へらんにはか
ならすおほし出て思ひいりにけんみちもさまたけ
給てんかしさてさなの給ひそなとやきこえをき給
けれはやわれにはさることなんきゝしとさるめ
つらしきことをきこしめし（明石ノ）なからの給はせぬに
やありけん宮もかゝつらひ給にてはいみしう
あはれと思ひなからもさらにやかてうせにし物
と思ひなしてやみなんうつし人になりて末の世
には黄なる泉（地獄ノ[illegible]ト云）のほとりはかりををのつからかた
らひよる風のまきれもありなん我（ワガ）ものにとりかへし

みんのひもつゝましなと思ひきこえてすくとな給（アラハニ迄ハ返トハ思ナカラモヤ）
しんやうしひとおほゆまてはゝかりなく
まへ大臣なとかゝるへきついてくらいてくすけい
きこわたるましくてうしろひ給ぬと心あくかるゝ人
なかなかあふれたくあく座ては人のまゆひそめし
うついつくしかるあやをとりしひとこひ給まてしと
おとろくしうりくもおほくこともきゝなれやとこ
わかきこはら人のこきはる給またまて人のみなかと侍し
やうすくまさるやうのやうかんとまはかりし
思ひ給へうおほくとて余すこしやましいかに侍る文の御（白恨ニヤ）
おまれひこそいひし思ふたまへつしうしろもとなる

さ衛よをいひすし給てそのたまはくさなんと
きこえをきゝ人らしくてくおほえれくしくとおほ
御まへなへしのおほさくあやしもしをすゝかにまて
すくし給ふんと思ひし給へた僧都のこゝろしるしま
りとこのおほうろしうこしのあとまくみてかと
とゝめ給ひしかとはかう宮きいつてのきて給えん
きこえしおほかたりつゝ侍あらはれもそうおほさ
こきをたゝまりてきく侍る給りんようにやとくるしの
おほへけまつおられまたまほしまくいそのろくう大福
けのこまさうとまれぬよめ給はゝひうくなんともの（白ノ紐好色ウチトト中宮申侍リ）
給まひいやとそれ給ふなれとのかれらひしさうら

とは世にそしりまでも人の思ひてけりしきんこと
そのゆへさうを行えじなしおぼしをすし（大内ん）しん山さわ寺
の御ためこすのあんりのまゝしてさあしらへすみ
よろ御経仏などかひてこそいつゝのなかありさは
もすあはせなどしてとをうく尼やふべうめでたきなと
こゝあはれあやしとおぼかうしおぼしを月ごとに八日まで
かならずたうときわざせさせ給へば薬師仏に
よせたてまつるにもてなし給へるたよりに中
堂にはときどき参り給ひけりそれよりやがて横川
におはしまさんとおぼしてかのせうと（ウキノ弟）のわらはゐたる
其そしおはしますその人（ウキノ母）へはまづとくもしらせじとおぼさまし
ままぞしたがはんとおぼせどうちみんゆめの心ち（薫ノ心ニ人を見そめられ今ハあふする人もあらん）
にもあはれをもくはへんとにやありけんさすが
にその人とはみつけながらあやしきさまにかう
ちことなるひとのなかにてうきことをきゝつけ（ウ氏ニテ尼ナリシ所ヲヤ）
たらんこそいみじかるべけれとよろづにみちを
すがらおぼしみだれけるにや

国立国会図書館

国立国会図書館　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『[源氏物語] 54巻』 請求記号

ガラス使用